佳作
（一般の部）

「繋がる」

米田　詩麻

柳田先生、こんにちは。今日は私にとって大切な絵本との関りについて書こうと思います。

私が小さい頃、母が体が弱かったこともあり、父がよく絵本を読んでくれました。中でも私が大好きだったのは「だるまちゃんとかみなりちゃん」です。自分もだるまちゃんになって、かみなりちゃんの国に行きたい。プールで遊びたい。おいしそうなお土産をもらって帰りたいと思ったものです。読んでもらった後、またすぐに「もう一回読んで」と言ってたことを覚えています。読むのが絵本から童話、小説へと変わっていく中で、すっかり絵本のことは忘れていましたが、ある日書店で久しぶりに「だるまちゃんとかみなりちゃん」の絵本を見つけ、”この絵本大好きだった”という思いとともに、父に読んでもらったこと、絵本のワクワク感など思い出し、心が温かくなりました。

今、私は保育士をしています。子供たちに絵本の楽しさを感じてほしいと思って、毎日絵本の読み聞かせをしています。「どの絵本を読もうかな？」「子供たちが興味を持ちそうな絵本は何かな？」と考えるので、子どもたちのためと言いながら、自分にとっても絵本との出会いが広がっています。

「先生今日は何の絵本？」とワクワクしながら聞いてくる子供たちの表情を見ると、私も嬉しくなり、読み聞かせはやめられません。

さて、私が子どもの頃の思い出の一冊は、「だるまちゃんとかみなりちゃん」だと書きました。その話を夫にしたところ、ある日、実家から一冊の絵本を持ってきました。絵本の題名は「そらいろのたね」。「自分にとってはこの絵本が思い出の一冊なんだ。」と話す夫。理系男子で、普段はあまり口数の多くない夫が、絵本の思い出を語るなんて、私は少し驚きました。絵本を通して繋がった感覚が嬉しくもあり、意外な一面を発見できた喜びもありました。ついでにと言ってはなんですが、二人の娘にも思い出の絵本を聞いてみました。すると長女（中二）は「うーん、これかな」と『とっときのとっかえっこ』を。次女（小五）は「わたしはこれ」と『どれがぼくかわかる？』を選びました。“へぇ～、そうなんだ”と、娘たちのチョイスにも新鮮さを覚えました。当たり前のことですが、それぞれに感性があり、それぞれが違うのだと。

いつか保育園の子供たちが大人になって絵本を手にとった時、「この絵本読んでもらったことがあるな」と思い出してくれることがあったら素敵だなと思います。絵本が繋げてくれる、絵本で繋がっていく。そんな感覚を大切にしたいです。

柳田邦男先生からのメッセージ

荒川区以外の地域からおたよりを寄せてくださり、うれしいです。

保育士として、子どもたちから、「先生、今日は何の絵本？」と尋ねられるほど、毎日の読み聞かせが期待されているとのこと、いいですね。

米田さんのおたよりで興味深く感じたのは、「思い出の一冊の絵本」というキーワードで、夫に『だるまちゃんとかみなりちゃん』の話をしたところ、普段は絵本の話などしたことのない夫が、実家から「そらいろのたね」を持ち帰って、「この絵本が思い出の一冊」と話してくれたというエピソードです。

一般に夫婦であっても、お互いに子ども時代のエピソードや成育歴のことなどは、話し合うことが少ないものです。米田さん夫妻のように、「「思い出の一冊の絵本」というキーワードから、それぞれの成育歴の一端を共有し合うということは、お互いの心のなかにあるもの、あるいは感じたり考えたりする傾向の背景にあるものへの理解を深めるという意味で、とてもだいじなことだと思います。

中学二年生と小学校五年生になった二人の娘さんとの間でも、「思い出の一冊の絵本」の話をして、「へぇ〜、そうなんだ」と新発見をしたとのこと。これも互いにわかっているようでそうではない親子関係の中で、相互理解を深めるうえでいい刺激になるエピソードですね。

この機会に、夫婦や親子の間で、「思い出の一番楽しかったこと」「思い出の一番感動したこと」などのキーワードで話題を出し合うのも、楽しいことになるでしょう。

もう一つ、私が感じたこと。米田さんが幼かった頃、体の弱かったお母さんのかわりに、お父さんが絵本をよく読んでくれたとのこと。そういう

お父さんのやさしさ、子を思う心が、米田さんを絵本好きにし、やがて米田さんが結婚してから、今度は娘さんたちを絵本好きにする役目を果たしたばかりか、夫との間にも絵本を介して理解を深めることにつながっていったのですね。絵本が一家の文化になっているなと感じました。おたよりのテーマを「繋がる」とした米田さんの著眼は、しっかりと伝わってきました。